

Lesson Preparation by Watching a Video in Nursery and Elementary School Teacher Training Courses

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮崎, 真利子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1552

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



保育者・小学校教員養成校における 動画視聴による弾き歌いの予習

Lesson Preparation by Watching a Video in Nursery
and Elementary School Teacher Training Courses

宮崎 真利子

MIYAZAKI, Mariko

1. はじめに

ここ2～3年、弾き歌いの予習として、インターネット上の動画を視聴する学生が増えてきた。コロナ禍以前は、動画を参考程度に視聴する学生を時折見かけたが、オンライン授業を行った2020年度以降は、インターネット上の動画をそのまま真似た演奏をする学生や、楽譜をほとんど読まずに「動画サイトを検索して練習をした」と話す学生を、頻繁に見かけるようになった。特に、動画視聴による予習を行っている学生は、楽譜を正確に読むことが苦手であるが、自主的に未修曲に挑戦し、意欲的に練習に取り組んでいる。このことから、動画視聴による予習を、読譜やピアノ演奏が苦手な学生に行うことにより、弾き歌いへの練習意欲が向上するのではないだろうか。

この考えのもと、本研究では、読譜やピアノ演奏が苦手な学生を対象に、一定期間、動画視聴による予習を行ってもらい、練習への活用方法を調査した。そして、動画による学習の利点、欠点を整理し、今後の指導にどの

ように活かすことができるのか論考した。

2. 動画学習の実態調査

対象は、読譜や弾き歌いを既に1年間学んでいる、本学の2年次の学生とした。まず、学生は動画を普段どの程度利用しているのか、担当学生16名全員にアンケート調査を行なった。「読譜がどの程度できるか」の質問には、約半数近くの44%が「楽譜に事前にドレミなどのカタカナで読み仮名を書き込んで読んでいる」と回答した。次いで「楽譜は読めるが、時間がかかる」が31%であったが、実際に指導をしていると、この回答には個人差があり、「読めないし見当もつかない」(6%)に近い学生もいれば、「時間をかけずに読める」(19%)学生も混在している。先の質問で、「楽譜は読めるが時間がかかる」、「読めない」と回答した学生に、「講師や友人の演奏している様子を見ながら学習したことがあるか」と追加質問したところ、83%の学生が「ある」と答えた。この結果から、読譜が苦手な約8割近い学生が、演奏している様子を観察すれば、ある程度楽曲について理解したと感じている。

キーワード：弾き歌い、ピアノ学習、幼児教育、小学校教員養成課程、ピアノ演奏初学者

Keywords : playing and singing, early childhood education, elementary school teacher training, piano beginner

「新曲を学習する際、動画を参考にした経験があるか」の質問には、88%の学生が「ある」と回答した。そのうちの、69%は「わからない時のみ検索」しているが、残り31%は、新曲を学習する度に、「毎回動画を検索している」と回答した。動画視聴目的は、「音楽の全体的な流れを知るため」と「演奏方法を知るため」の半数ずつの回答であった。

以上の結果から、現在の学生にとって、動画視聴は、弾き歌いの予習をする上で不可欠なツールになりつつある。

3. 動画視聴による予習

アンケート調査結果と1年次の音楽の成績評価を考慮し、読譜が苦手で、日頃から演奏動画を参考に行っている4名の学生を対象に、12回にわたり、動画視聴による予習を行ってもらった。

3-1. 普段の練習について

対象学生には、普段の練習についてアンケートを行なった。まず、1週間の練習時間については「1日15～20分を週2回」が半数の2名、「1日25分程度を週3回」と「1日5分程度を週4回」が同率で各1名となった。ピアノは継続的な練習や、まとまった時間がないと上達しにくいいため、1日15～20分を週2回と回答した学生は、1週間でスムーズに弾き歌いができるようになるのは難しいと思われる。

次に複数選択で、練習についての悩みを聞いたところ、「楽譜を正確に読む自信がない」が3名、「指が思うように動かない。思うように弾けない」が2名、「特になし」が1名いた。この回答から、楽譜が正確に読めているか不確かなまま、練習をしている学生が多い。

練習への悩みを、これまでどのように解決してきたか、という問いには、複数選択で、「動画を視聴する」と「友人に聞く」が同率で4名、「楽譜に読み仮名を振る」が3名、「音源を聴く」と「個人で習っている先生に聞く」が同率で2名となった。

調査対象の学生は、楽譜が読めない不安を、インターネット上の動画を視聴し、わからない部分は友人に聞き、楽譜に読み仮名を振るなどして、これまで弾き歌いに対する悩みを、独自に工夫して解決してきた。しかし、どれも手軽な手段ではあるものの、正確さに欠け、信頼のおける情報であるとは言い難い。

3-2. 視聴する演奏動画について

筆者は「保育者・小学校教員養成校におけるオンラインによる弾き歌い指導」（埼玉学園大学研究紀要第20号、2020年）の中で、学生にオンデマンド方式による動画視聴指導を行ったが、授業回数を追う毎に、再生回数が減少したと報告している。さらに、本学では2020年6月以降、音楽の実技レッスンでの、オンライン学習や指導を殆ど行っていない。そのため、本学で利用しているリモート学習ソフトTEAMS内での視聴は、学生にとって手間がかかり、予習へのハードルが高いと考えた。そこで、学生がいつでも学習することができるように、学生自身が所有するスマートフォンに、筆者の演奏を撮影してもらい、その動画を視聴して予習してもらうことにした。この動画による予習は、個々の演奏の問題に合わせて動画を提示しているため、必ずしも同じ条件の下、撮影を行なっているわけではない。しかし、基本的には楽曲の通し演奏を、鍵盤の位置や指使いがわかりやすいように、手元を中心に撮影してもらった。

3-3. 演奏動画を全面的に活用する

まず、楽譜は全く読めず、日頃から演奏動画を視聴して練習をしている学生を例に挙げる。初回から学生Aは、1年次の春休みに出された弾き歌いの課題「しゃぼん玉」を、動画サイトの演奏を真似て演奏してきた。努力している様子は見られたが、原調の譜面のハ長調ではなく、動画サイトで演奏されていたト長調で演奏し、左手の伴奏は演奏動画を真似ているが、不完全な出来であった。学生Aが参照した演奏動画は、音楽ゲームのように、押さえた鍵盤が光り、鍵盤の位置が視覚化された、初心者にわかりやすい動画であった。しかし、左手の伴奏が複雑でわかりにくいため、ト長調のまま、筆者が再度平易な伴奏に編曲した。その演奏を撮影してもらい、視聴して練習してきてもらった。学生Aは、撮影した動画を1週間に5～6回視聴し、演奏が進む毎に再生と停止を繰り返しながら、演奏を修得していった。基本的にはリズムや指使いを真似た演奏ができていたが、撮影時に一部指の動きが見えにくい箇所があり、その部分になると弾きにくそうにしていた。また、伴奏が弾けるようになってから歌を加えたものの、ト長調で「しゃぼん玉」を弾き歌いすると非常に高い音域になるため、歌う時に音程が取りにくそうな様子であった。このことから、独学で手軽にピアノ演奏法を修得する目的としては、動画サイトは役立つが、その動画が歌唱に適した調性かを独断で見極めることは難しい。

その後、学生Aは上級の曲を中心に学習したいという要望があったため、上級の曲を1曲、複数週に渡って学習し、初級の曲も時折学習曲に加えながら、レパートリーを増やしていった。毎回演奏動画を参照して予習して

もらい、レッスンでは弾きにくい部分の演奏法と、読譜を中心に、指導を行った。初級の曲は、平均して約1週で完成させることができた。練習時間が満足に取れなかった週でも、直前に動画を見て、片手だけでも弾けるような状態になっていた。しかし、上級の曲は、何度も視聴して努力して練習している様子は見られたが、伴奏の正確さに欠ける演奏であった。しかも、正しい歌詞で歌えないことが多く、その場では直せるが、通して演奏すると再度歌詞を間違えてしまうことが多かった。このことから、初級レベルの曲の視聴はある程度上達する効果があるが、難易度の高い曲になると、歌詞や伴奏の正確さに欠けてしまう。しかし、練習への意欲は高く、難易度の高い曲に積極的に挑戦していたことから、モチベーションの向上には役立つと考えられる。

3-4. 演奏動画を補助的に活用する

読譜の基本的な知識や能力はあるものの、読譜への自信がない学生について、どのように動画を活用することができるだろうか。

学生Bは、1年次に中級レベルの教材を学習していたため、読譜に関する基本的な知識は身につけているはずだが、楽譜に振り仮名を振っていた。特にへ音記号の読譜は自信がないとのことで、予習動画として、左手のみ演奏した動画を視聴してもらった。練習時は2～3回程度視聴し、楽譜の音がわからなくなった時のみ動画で確認していた。しかし、レッスン内でへ音記号の読譜指導を行うと、回数を追うごとに、1回の視聴で演奏を理解するようになり、最終的に、初級レベルの楽曲は動画で予習せず、自分で読譜して弾けるようになった。しかし、上級レベルの楽曲に

なっても、読譜への不安が残るとのことで、両手の演奏を撮影し、動画を参考にしながら練習を行っていた。基礎的な読譜能力がありながらも読譜への不安がある場合、補助的に演奏動画利用することで、伴奏法や鍵盤の位置が明確になり、演奏や読譜への自信がつくようである。

3-5. 休みがちな学生と動画学習

欠席が多い学生に、動画学習は役立つのだろうか。学生CとDは、初回から春休み中に弾き歌いの課題をしてこなかったことと、連絡なく定期的に欠席をするという共通点があった。欠席時に学習中の曲がある場合は、前週に撮影した動画を使って個人練習ができるはずだが、両者とも、1度も動画を見ないままレッスンに来ることが多かった。また、学生Cには、予習ができるように欠席時にメールで個別に演奏動画を送ったこともあったが、返信はあったものの、実際にそれを見て練習をしてくることはなかった。

しかし、動画が欠席中の補習として全く学習効果がなかったという訳ではない。学生Dからは、「動画があったおかげで、欠席中に自主的に練習することができた」と話していた。また、研究対象外の学生であるが、事前に欠席予告があった学生に、新しい課題として演奏動画を撮影して予習してもらったところ、欠席の翌週に弾き歌いをほぼ完成させてきた。その学生からは、「欠席中でレッスンの期間があいてしまっても、動画があったので大変参考になった」とフィードバックがあった。

また、参考動画がないまま欠席してしまうと、レッスン中には覚えたことを忘れてしまうこともある。学生Cは、欠席の前週に、「楽譜は読めるので動画は不要」という理由で撮

影をしなかったが、欠席した翌週のレッスンで「リズムがわからない」と申し出たため、欠席期間の練習時間を有意義に使うことができなかった。

このことから、欠席時の演奏動画学習はレッスンの内容を補完する目的に於いては役立つが、必ずしもそれは、どの学生にも万能に働くわけではない。動画があることで、指導者側、学生ともに安心してしまいがちだが、結局は本人の自主性が必要となってくる。

3-6. 動画学習によるレッスンの効率化

先の学生Cのように、準備をせずに弾く曲がない状態でレッスンを受けにくる学生を時々見かける。通常は、その場で譜読みや演奏の指導を行なっているが、限られた時間の中では解説のみに終始してしまい、学生がほとんど演奏しない状態でレッスンを終えてしまうことが多い。しかし、レッスンでは練習した前提で演奏する方がスムーズな指導に繋がる。この問題を解消する手段として、動画学習による予習を応用できないかを試みた。

まず、レッスン開始時に動画を撮影してもらい、個別に課題を与え、その後別室で20～30分程度、自主練習をしてもらった。自主練習後、レッスンを再開し、再度10分程度の指導することにした。練習をしてこなかった、学生Bには「森のくまさん」の両手演奏を、学生Cには「手をたたきましょう」の右手演奏を課題にして、自主練習をしてもらった。自主練習後には両者ともにスムーズな演奏で戻ってきた。学生Bの練習方法としては、曲の全体像を掴むためにまず1回視聴し、その後右手のみ練習した。その後、左手の動きの確認のために再度視聴し、両手で演奏を行い、さらにわからない部分を動画で振り返るとい

う方法だった。学生Cは、普段から練習が苦手な様子が見受けられるが、限られた時間で限定された課題を動画で与えたことにより、集中して課題に取り組めた様子であった。自習練習後のレッスンでは、結果的に進度を早めた状態で指導することができた。この試みから、漫然とした練習や理論的な説明よりも、時間と課題を限定して動画を使った練習をした方が、レッスンの効率化に繋がる。

4. 動画視聴による予習を終えてのアンケート

動画視聴による予習期間を終えて、対象学生にアンケートを行なった。「練習時間は以前より変化したか」については、「変わらない」と「増えた」が、ともに2名ずつであった。練習時間に変化がなかった学生にその理由を尋ねたところ、「他の授業や課外活動で忙しくなったため」と「ピアノ学習に興味がなくなった」と回答している。このアンケートは選択式の回答のため、以前よりピアノに興味が無かったのか、受講している中で興味が無くなってしまったかは不明であるが、対象学生の中で「練習時間が減少した」と回答した学生は一人もいなかった。

また、読譜について、「読み仮名を振らずにスムーズに読めるようになりたいと思うか」の質問については、「とても思う」が1名、「少し思う」が3名であった。この結果から、弾き歌いをするにあたって、読譜が基礎となっていることを全員が自覚しているようである。しかし、「少し思う」が多かった結果を見ると、多少楽譜が読めずとも、動画視聴が、この問題を解決することができると考えているようにも見える。

5. 動画学習の利点と欠点

これらの試みを経た上で、動画学習にはどのような利点と欠点があるだろうか。利点として、動画学習は、楽曲の全体像を音や映像で捉えることができる。読譜が苦手な学生にとって、楽譜を読みながら自分で演奏するだけでは、音楽の全体像が見えにくくなり、練習意欲が低下してしまうことも少なくない。

2018年の小栗・長澤らの「保育者養成課程におけるICTを用いたピアノ教育の効果：介入群と統制群の比較実験を通じた検証」(2018)の研究によれば、読譜のみ行なった予習と動画を利用した予習を比較したところ、動画による予習の方が、読譜による予習よりも練習時間が短いにもかかわらず、正確に演奏できているという結果が出ている。本研究でも、映像化された演奏で、音楽の全体像や運指方法を把握しやすくなり、練習時間の短縮化につながる結果となった。このことは、指導の効率化に繋がることが期待できる。

しかし、動画視聴を指導のツールとして利用するには、まだ問題点や課題が多い。まず、動画を見ながら演奏することにより、かえって練習の効率が悪くなる可能性がある。動画視聴では耳で聴き、指の動きを見ながら演奏方法を覚えていくため、何度も再生する必要があり、結果的に読譜よりも時間がかかってしまう。また、楽譜を全く読まずに動画視聴を中心に学習する学生に対しては、楽譜上での指導や説明がしにくくなる。そして、動画で学習すると、歌詞を読む習慣がなくなってしまうため、ピアノ演奏はある程度できても、歌詞を正確に覚えることができない。

さらに、現在のインターネット上の動画には、音楽教育の観点から信頼できる演奏動画

が多いとはいえない。動画サイトの中には、わかりやすく解説した演奏動画が数多くあるが、それが個々の能力に合ったものなのか、また信頼のおける情報なのか、疑問が残る。本研究では、筆者の演奏を個別に撮影してもらったが、その動画が初心者にわかりやすい動画であったとは言い難い。今後、保育者、小学校教員志望のピアノ初心者のために、さらにわかりやすい演奏動画を研究・開発していく必要があるだろう。

6. まとめ

保育者、小学校教員養成校の学生は、現場で苦勞しないためにも、卒業時まで楽譜を滞りなく読めることが望ましい。しかし、現場では、音符全て読み仮名を予め振られた楽譜が使われていることが多い。このことから、保育者、小学校教員養成校のピアノ初心者に、読譜の技術を短期間で身につけさせることが、いかに難しいかということを実感する。

読み仮名が振られた楽譜は、容易な伴奏の楽譜のことが多い。一方、演奏動画の場合は、演奏方法が視覚化されているため、見よう見まねではありながらも、難しい編曲にも挑戦しやすい。さらに、動画学習は、読譜が苦手な学生だけでなく、近年増加している学習障害の学生にとっても効果があると考えられる。

今後、信頼のおける演奏動画があれば、時間を選ばずに、保育者や教員も弾き歌いを学び直すことが可能になるだろう。既にゲーム感覚で学べる動画や、SNSで受講者が講評し合う動画コンテンツの開発や試みも始まっているが、まだ大学内等の閉じられた環境に限られている。今後、保育者、教員がいつでも学べるように、信頼のおける機関による動画、オンライン上の教育コンテンツを作ることが、

必要になってくるのではないだろうか。

参考文献

- 小倉隆一郎、「子どもの歌の学習支援にオンラインストレージとSNSを利用する試み」、『文教大学教育学部紀要』第49号、2015年、223～230頁。
- 小栗貴弘・長澤順・岸本智典・青木章彦、「保育者養成課程におけるICTを用いたピアノ教育の効果：介入群と統制群の比較実験を通じた検証」、『作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部教職実践センター研究紀要』第6号、2018年、57～67頁。
- 藤原一子、「弾き歌いの予習・復習を行うためのデジタル教具作成の試み－保育士・幼稚園教諭養成課程に在籍する学生を対象として」、『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要』第54号、2020年、73～82頁。
- 藤原一子、「弾き歌いの予習・復習を行うためのデジタル教具作成の試みⅡ－保育者をめざす学生のためのピアノ学修補助教材開発に向けて」、『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要』第55号、2022年、91～99頁。
- 宮崎真利子、「保育者・小学校教員養成校におけるオンラインによる弾き歌い指導」、『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』第20号、2020年、375～380頁。